

平取ダム建設への道費負担見直しの要望

私たちは、昨年(平成)19年11月18日に平取町二風谷で沙流川のダム問題に関する現地集会を行い、稼働後わずか10年にして当初計画の堆砂容量(稼働10年後の想定堆積量)の2倍を超える土砂が堆積してしまっている二風谷ダムの危機的状況と、支流の額平川に新たに建設されようとしている平取ダムの建設予定地一帯を視察しました。そして視察後の論議の結果、二風谷ダムの破綻状況を見直して沙流川に新たに平取ダムを建設する事は、道民として許されない事だと結論に達し、12月19日に、開発局に対して別添のような反対の決議文と公開質問状を提出しました。つきまして、この平取ダムの建設費用の一部を負担する事になっている北海道に、是非費用分担を見直すよう、要望します。

北海道は、1997年に「時のアセスメント」を政策会議で決定しました。いまさら言うまでもなく、これは停滞している政策に時間という新たな評価の物指しを当ててその妥当性を点検・評価し直すという、全国に先駆けた画期的なものであります。その結果、道道土別然別湖線の整備をはじめとする六つの事業が取り上げられ、それぞれ廃止と成ったわけですが、その半数を占めたのは、「松倉ダム」、「白老ダム」、「トマムダム」の三つのダム計画でした。これを見ましても、日本列島改造論時代に公共事業の目玉として各地に乱立したダム建設計画のなかに、いかに見直すべきものが多いかが分かります。

北海道によるこの「時のアセスメント」は、地方分権の方向をふまえ、乱開発時代の負の遺産である無駄な公共事業の見直しを社会に呼びかけた大きな決断として、今も全国的に高く評価されております。しかしながら、この「時のアセスメント」による見直し事業は、国が直轄する公共事業に対しては、北海道がその一部を負担しているにもかかわらず、これまでのところ全く及んでおりません。

沙流川流域に新たに作られようとしている平取ダムは、まさに「時のアセスメント」によって見直すべき国の事業だと私たちは考えます。そもそも平取ダムの建設計画は、完成後10年にして早くも土砂の堆積によって破綻に瀕している二風谷ダムとセットの「二ダム一事業」として、苫小牧東部工業基地に25万トン/日の工業用水を供給するためのものとして計画されたものです。しかし先の「時のアセスメント」は、巨大な負債を残して無残にも瓦解した苫小牧東部工業基地計

画の関連事業であるこの「苫小牧東部地区第一工業用水道事業」をその筆頭に取り上げ、平取ダムからの工業用水の取水計画を全面的に取止めにしました。これによって、平取ダムの建設計画は本来の目的を失ったはずでした。ところがそれにもかかわらず、現在では“治水を主とする多目的ダム”と建設目的を変えてなお計画が進められています。理由はどう変えてもとにかくダムを作りたいという、全国で批判を浴びているダム問題の典型といっても過言ではありません。

この平取ダムの建設にかかる今後の費用は、461億円となっています。そして北海道は、その15%、すなわち69億円を負担することになっています。私たちは、この「工事のための工事」の見本と言うべき平取ダムの建設に道民の血税が使われる事に強い疑問を感じないではられません。私たちは、このような事業にこそ「時のアセスメント」による見直しがかけられるべきだと考えます。しかも、昨年7月の計画変更によって平取ダムは排砂ゲート方式のものになりました。しかしこの「排砂ゲートダム」は、昭和60年に黒部川に出し平ダム、さらにその後下流に宇奈月ダムが作られて以来、大量のヘドロの定期的放出によって富山湾の漁業に甚大な被害を与えて大きな社会問題になっているものです。

また、平取ダムの建設予定地は、アイヌ文化の重要な祈りの場、チノミシリのある所でもあります。このことも、このダムの建設に反対する理由の一つです。

二風谷ダムの失敗を省みず、アイヌ文化の精神的拠点を破壊し、また下流・沿岸の漁業に大きな被害をもたらすことが明らかな、無駄な公共事業の典型である平取ダム建設への費用分担を、北海道が、1997年に「時のアセスメント」を政策決定した精神をふまえて、見直す事を強く要望します。 以上

北海道自然保護協会	会長 佐藤 謙
北海道自然保護連合	代表 寺島一男
富川北一丁目沙流川被害者の会	代表 中村正晴
十勝自然保護協会	会長 安藤御史
ザ・フォレストレンジャーズ	代表 市川守弘
自然林再生ネットワーク	代表 前田菜穂子
石城塾	代表 石城謙吉

事務局 二井田高敏

〒050-0085 室蘭市輪西町2丁目7-9

☎ 0143-44-4823

FAX 0143-44-4831